日韓アングラ劇界を縁結び

金京媛さん

演劇は社会の鏡、人々のパワーが映る

日本と韓国の演劇交流に携わって十年。舞台俳優と演出をこなしながら両国アングラ劇界の縁結び役をつとめている一人、金京媛さん＝東京・三鷹市在住＝に、最近の話題を交えながら日韓演劇交流についてうかがった。

（金総宰）

今年春、済州島・ソウル・東京で上演された「海の口笛」（劇団唐組）で異色の海女役を演じた。暮れの二十二日には金芝河の詩を銀座のステージで朗誦する。

ソウル生まれの京媛さんは韓国マスコミには「在日演劇人」と呼ばれている。演劇の勉強で日本を訪れたのが八五年。大阪芸大で舞台芸術を学び、以来日本と韓国を行き来。周囲に日韓演劇ネットワークをつくった。韓国の演劇界で活動し、日本の演劇界でも活躍しているという意味で珍しい存在と言える。

「韓国でビザ取得が自由になったのが八八年ですが、私はもう少し早く日本を経験しました。ですから日本を韓国に伝えたい、韓国を日本に伝えたいという気持ちが働いていたんじゃないでしょうか。こちらの空間を説明しながらあちらの空間にフィットさせるにはパワーが必要。大変ですけど私にとっては自然でした」

■

草創期の韓国アングラ劇

出身。そのスピリットが京媛さんのまさにやろうとしてきたことだったのだろう。

「韓国のアングラ劇の先駆けと言えるのは劇団エ・ソ・トです。人がしゃべるは一時のエ・ゾ・ト、あのねという声ですね。そこからきた名前で名前通りにちょっと前衛的な劇団でした。七一年上演の「スズメと機関車」でデビューした。

あれから二十年。今年参加した唐組公演「海の口笛」女の生命「緑の血」に象徴は済州島四・三事件（一九四八年）に題材をとった海女の物語だ。蜂起鎮圧と虐殺から逃れるため日本に渡った海女の一代記を韓日の

唐十郎氏と金芝河氏はこの「海の口笛」ソウル公演

▲キム・ギョンウォン　1957年ソウル生まれ。韓国伝統芸能を学んだ後来日。舞台芸術の道を歩む。出演作品に「海の口笛」（劇団唐組）、「それは私の夢じゃない」（劇団DA・M）、「風の埋葬」（日韓行為芸術祭）、演出作品に「統一のためのマッコリ・サルプ」「離婚しなけりゃ再婚はできぬ」（劇団イダ）など。翻訳に『現代日本の戯曲10選（第一集）』（韓国語）がある。（撮影・金総宰）

で長らくぶりに再会した。京媛さんによると再会は二十五年ぶり。"唐さんは当時のことを全部覚えていたけれど、金芝河さんはすっかり忘れていた」と笑った。

当時のことというのは、韓国アングラ劇草創のころのこと。

金芝河氏と京媛さんとは七〇年代の韓国劇団「演友」の縁でつながっている。「演友」上演した「暗闇の子どもたち」に京媛さんは娼婦役で出演したが、金芝河氏は演友メンバーの大先輩という関係だ。

そんな縁で、七〇年代韓国社会に衝撃を与えた金芝河氏の詩の朗唱コンサートが銀座で開かれることになり、京媛さんが韓国語パートを演じることになった。

「詩にはパンソリのリズムがある。セリフよりは歌に近くて即興的な朗読になりそうです」と話す。

金芝河氏の詩は日本にも広く知られた。当時のファら「演劇というのは社会の鏡ですから、そこに生きている人の姿と同じと言えるでしょう。人々のパワーと表情が舞台に表れます」と、含みのある答えが返ってきた。

「海の口笛」発表会見での（左から）林賑沢氏、唐十郎氏、金芝河氏、金京媛さん（今年4月、ソウル・東崇洞文芸会館で）

テレビなななめよみ　香港編⑥

騒ぐなグルメレポーター

市原　千絵

女も三十代半ばとなり、周囲の同年輩には「このままおばさんになっちゃいけない！」とコブシ握る人、どうしよう、とあせっている人なんかが多いけれど、私なんか、むしろ「解禁！」という感じですね。ふふ、ここにまた一人新しく「今日びのオバサン」が誕生したぜ、そっちがその気なら（？）そっち」ってなんだ？）、やってやろうじゃないの、だわ。こうなったら、自分の判断とタフネスをよりどころに、ズンガズンガ行くからな、見てろよベイビー、であります。

そういう自覚もって生きてるから、最近わたくし、すぐ正々堂々と「おっかないオバサン」化してしまう。公衆の面前でイチャつくカップルを「絵になってないんだよ、お前ら！」なんて思って見てる時の私の顔、きっとコワイぞ、と思うし、会社で追加の仕事頼まれると「依頼作り方を教える番組と、名物、名店紹介や世界の味紹介などのグルメ・バラエティー番組とに分けられるけれど、「料理教室」の方は、まあ、良い。いつも中華料理ばかり作っているのが不満だが（ここ、香港だからあたりまえだろ）。先生がマニキュアぎときどきとの爪（つめ）をしていたり、指輪やブレスを取らないのも気になるな。得意料理を披露するタレントの手際がおそろしく悪かったり、絶望的に料理を知らない、というのもあるけど、こういうのは（あーあ、なんにも知らないんだから）と、むしろこっちの優越感そそってくれて、良い。

問題はグルメ・バラエティー番組の方だ。

日本もそうだけど、はっきり言って、この手の番組のレポーターって、うるさすぎる。

先日「突撃！　日本を食べつくす！」みたいな番組をやっていた。この時は四人の若いレポーターたちのバカ騒ぎ、不必要なお顧がせ香港人たちを見守る日本人たちの態度。温かく見守ってやるなさる時は一括して渡して下さいよね！」と上司にガンガンたてつく。そんな自分を振り返り（昔だったら、上の人にこんな言い方できなかったな……）としみじみします。一瞬後には（ふてぶてしいって、楽でいいやー）と笑うのだが。

◀　◀　◀

そんな私がテレビを見て、しばしば「怒りのパワー全開」を感じるのが料理番組関係。

料理番組といっても、料理の声で怒鳴ってやりたくなった。原宿の通りをただ歩く、というだけなのに小突きあったり、もつれあったり、まっすぐ歩けんのか！　そして入ったお店では傍若無人の広東語。周囲の日本人客の驚きも無視して、まさに我が物顔で大騒ぎ。しつけ、なっとらん！

◀　◀　◀

ここで意外だったのが、そんなお顧がせ香港人たちを見守る日本人たちの態度。温かく見守って、寛容だった。見直した。

以前、香港の海鮮料理屋で、TVカメラに向かってギャーギャー騒ぐ日本のタレントたちを見たことがある。

その香港人に対し傍若無人な態度に、私、それ見ててメキメキこわいオバサン化したのだが……同じようなことやってたんだ。今後は温かく見守ってやるか。

……プロフィル〉香港在住OL兼エッセイスト。著書に『ベリンでぷらぷら』、共著に『論よりコラム』。

芸能

アジア新鋭監督作品 初上映

NHKと国際交流基金主催、東京で

「下女」（提供・NHKプロモーション）

「台北ソリチュード～不受束縛的愛情～」

貴重な名画も

アジアの新鋭監督とNHKの共同制作によって作られた映画を中心に上映する映画祭「アジア・フィルム・フェスティバル97」が十三日から、東京・赤坂の国際交流フォーラムで開催される。

同映画祭はアジアの若い才能に映画発表の場を提供し、お互いの文化を理解しようという趣旨のもとでNHKと国際交流基金の主催によって九五年に初めて開催され、今年で二回目を迎える。

今回はリン・チェンシェン監督（台湾）の「台北ソリチュード～不受束縛的愛情～」とウ・ウェイ・ビン・ハジサアリ監督（マレーシア）の「闘牛師」、ズリフィカール・ムサーコフ監督（ウズベキスタン）の『I WISH……』、ブラサンナ・ヴィターナゲー監督（スリランカ）の「満月の日の死」の四作品が選ばれた。いずれの作品も三十、四十代の若手監督で、今回が初上映となる。

開催期間中は四本の最新作のほか、第一回の共同制作作品やアジア映画史のなかでも伝説化された名画を上映。これまで日の目を見ることのなかったアジアの傑作がそろった貴重な映画祭だ。

「蘇るアジア映画クラシックス」と題するプログラムでは、初めて日本で正式上映され、伝説的な名画といわれる作品の中でもえりすぐりの作品がそろった。なかでも、韓国では「魔性の女」（一九五八年）、「下女」（六〇年）、「神のいない三年間」（七六年）を上映する。

このほか作家・関川夏央の小説をドラマ化した「水の中の八月」は、多国籍の人々が暮らす東京湾岸のコンビナートの街を舞台に、在日韓国人と日本人の高校生の友情と現代の若者の浮遊感がさわやかに描かれる。

アジアの若手作家による「いま」が映し出された同映画祭は二十一日まで。入場料は前売り八百円、当日千円（全回入れ替え制）。問い合わせ＝NHKプロモーション（03・3476・5688）。

（石井桂子）

ジャカルタ出身で、今はフランスに在住している歌姫、アングンのインターナショナルデビューアルバム。インドネシアではすでに六枚のアルバムを出し、ライブには2万人の観客を動員したこともあるというベテランだ。最近日本でもよく聴く「スノー・オン・ザ・サハラ」をはじめ、曲調はとりわけエスニックを意識しているわけではなく、もっと普遍的なものを目指していることが伝わってくる。でも歌声はアジアの女の「情」。これがいいんだな、また。（ソニーミュージックエンタテイメント　2,345円＝税込）　（岡村牧子）

ANGGUN　アングン

マレーシアンチャイニーズシンガー柯以敏（ミンディ・クー）のアルバムをドリカム中村正人がプロデュースと作曲をした。「像恋人一様」は北京語で恋人のようにという意味。ミンディは93年にデビューしたルックスと実力兼ね備えた若手だ。96年、台湾デビューを果たし20万枚以上も売れたアルバム「Broken Thread」はテレビドラマのテーマソングにもなっている。本作は「LOVE LOVE　LOVE」の北京語版、「愛我」の広東語版、表題曲の3曲とカラオケバージョンが収録されている。（ソニーミュージックエンタテイメント台湾　輸入盤時価）　（岡村牧子）

像恋人一様　柯以敏

CD新譜紹介

2001年大韓ロックの旅

文・湯浅学　イラスト・根本敬

▶10◀

偉大な父親を持つと子供は苦労するというが、大韓ロックの父でありユーラシア大陸の音楽的宝であるシン・ジュンヒョン（申重鉉）を実の父に持つ三人の息子たちは、いかなる苦労をしたのか、我々には知るよしもない。しかしそれぞれに抜きん出た音楽的才能に恵まれたことは確かである。

長男デチョル（大徹）はシナウィでの活動でよく知られているが、次男ユンチョルは兄とは異質な（つまり大韓民国においてはかなりの異端というべき）才能を発揮してきた。

六六年二月二十三日生まれのユンチョルは高校生のときリザートというバンドを組み、ヘビー・メタル系のコンサートでは異色のレパートリー（たとえばピンク・フロイドのナンバーなど）を披露していた。俺が初めてユンチョルを見たのは八五年十一月のことだったが、あくまでもクールでいながらひたむきさが美しい、それでいて何をするかわからないいい意味で〝不隠〟な魅力をすでに発していた。八八年にレコード・デビューし、父重鉉もその曲作りの才能を大いに賛えたが、そのファースト・アルバムは放送禁止処方を受けてしまう。オあればこその事件だろう。その後スタジオ・ミュージシャンとして多くのアーティストをサポートし、二作のソロ・アルバムも発表した。内省的なポップが聴くほどに心にしみる、いずれも傑作だった。

ユンチョルのギター・プレイ、作曲術は他人からの引用をまったく感じさせない。自分勝手な清々しさに満ちている。情景と心象をゆらゆらと重ね合わせる才能は流行に流されぬ硬派なものだ。九六年には女性ボーカルを交えたバンド＝ボクスンアを結成。シン・ジュンヒョンのトリビュート・アルバムで聴けるボクスンアによる「ボム」は、父のスケールの大きな思考を幽玄の世界に照射したかのような特筆すべき名演であった。ボクスンアの今後に多くの期待が寄せられたのだが、ユンチョルはあっさり大韓での活動を捨て、イギリスに音楽留学をしてしまったのである。なんというクールネス。一生涯自分を探り続けるその姿勢こそ実は、父から学んだ一番の財産かもしれない。

不穏な魅力　シン・ユンチョル

東洋商事株式会社
〒454　愛知県名古屋市中川区福船町1－1－2
TEL（052）352-2188／FAX（052）352-2199
代表取締役会長　金　在　學
［在日本大韓民国民団中央本部　顧　問
在日本大韓民国民団愛知県本部　顧　問
在日大韓体育会中央本部　常任顧問］
代表取締役社長　金　好　雄
中川トーヨー　〒454　愛知県名古屋市中川区福船町1－1－2　TEL（052）352－2188
南トーヨー　〒457　愛知県名古屋市南区要町5－13　TEL（052）611－8888（代）　FAX（052）611－8880
大府トーヨー　〒474　愛知県大府市長草町田ノ神21－1　TEL（0562）46－6651

立花グループ
(株)立花会館
(有)立花
立花商事(株)
社長　金井　哲夫
（韓国JC海外地区第16代会長　宝塚王仁ライオンズクラブ第16代会長）
副社長　金井　義夫
（韓国JC海外地区第22代会長）
〒660 尼崎市七松町1丁目1番1-121号
TEL(06)416-7343　FAX(06)419-3510

キンダイ観光有限会社
代表取締役　崔　炳　郁
本社　〒683 鳥取県米子市両三柳222番地1　TEL（0859）34－4347㈹　FAX（0859）34－4352
松江事務所　〒690 鳥取県松江市東津田町426番地　TEL（0852）23－4440㈹　FAX（0852）23－4747
パーラーキンダイ米子　鳥取県米子市両三柳222－1／TEL(0859)34－4347
パーラーキンダイ松江　鳥取県松江市東津田426／TEL(0852)23－4440
雀荘キンダイ・カラオケキンダイ　鳥取県米子市蚊屋200－38／TEL(0859)27－2829